

# 武道、いわゆる武士道とキリスト教

- 日本におけるキリスト教宣教の一課題として -

笹森 建美

はじめに

敬愛する、T.S.キッチン師に献呈する「記念論集」に寄稿するに当たり、<sup>いささ</sup>些か私的な内容となるが、初めに感謝の意を表すと共にこの論文の目的に触れておきたい。

キッチン師は、40年の長きに亘り、日本における宣教のために真摯に尽力されたが、筆者はその当初から色々な形でご指導と交誼<sup>こうぎ</sup>をいただいた者の一人である。すなわち1950年代の初め、青山学院教会<sup>(1)</sup>において交わりを得たのを初めとし、その後青山学院キリスト教学科に学士入学をした際には、新約学を教授頂いた。更に、1960年代筆者が奉仕していたニューヨーク日米合同教会において、ユニオン神学校に研究に来られたキッチン先生及び御家族と再会した。その上1969年帰国し、私宅を解放し両親と共に駒場エデン教会を創設、伝道を開始した時<sup>(2)</sup>、その初めから教会活動に御夫妻揃って参加され、聖日礼拝、修養会、役員会、諸集会等々親身になって今日に至るまで支援を続けて下さっている。マーガレット夫人が突然天に召された日も、先生は当教会で説教の任に当たって下さっていた。10人そこそこで始まった駒場エデン教会であったが、当教会が今日まで宣教の歩みを続け得た背後には、キッチン先生夫妻の御支援があったことを思い感謝せずにはいられない。

キッチン師はアメリカの教会から派遣された宣教師、神学者として、地道に日本における宣教の業に従事されたわけであるが、われわれ自身がどれだけ日本の宣教に熱心であるか反省せざるをえない。

当エデン教会は、教会と共に礼楽堂<sup>(3)</sup>という道場を併設する、一般常識的には奇異な感を与える教会である。キリスト教界に属する人々も、剣道界の人々もそして一般の人々も、キリスト教と日本古来の武道との間に違和感或いは矛盾を覚える者が多い。しかし果たしてそうなのであろうか。その問題が本小論の本題となるわけであるが、キッチン先生はアメリカ人でありながら日本人よりも日本的なものにより自然に理解を示し、駒場エデン教会の背景であり、養分の一つである武道に対しても共感をいだかれている。

日本の慣習、伝統、文化、特に精神文化に関心を持つのは、日本において宣教に務める者としてむしろ当然のことではないだろうか。日本にキリスト教を弘め、根づかせようとする者たちにとって、日本精神文化の重要な要素の一つである「武道」は避

けて通れないものである。しかるに、今日この問題に関心を示すものが誠に少ないのは残念なことである。そのことが依然としてキリスト教が日本の社会に根を下ろせないでいる原因なのかもしれない。

明治初年多くの武士出身の者たちが、キリスト教と武士道との間に接点を見出し、武士道の成就と救いを見出したのは既に多くの者に依って明らかにされている通りである。しかし昨今、キリスト教と武道に関する発言が少ない。そこで些かでも武道に関わるキリスト者として、武道に焦点を合わせ一考を述べることにしたい。そのことがキッチン先生を初めとして日本を愛し、日本のために尽くして下さった多くの宣教師の方々に対する謝意の<sup>しるし</sup>徴になるのではと思い、この小論を記す事とした。

## 問 題 点

- なぜ日本でキリスト教は根を下ろさず、大きく発展しないのか -

### 1 社会との関わり合い

教会は福音宣教の場として、この世界と無関係ではあり得ない。歴史を振り返る迄もなく、キリスト教は根を下ろして行った夫々の地域において、その地域がもつ文化と深い関わり合いを持って来た。迫害された時も、歓迎された時もあったが、衝突、折衷、克服、変容を繰り返しながら夫々の土地の固有の文化と関わってきた。

このようにして、キリスト教は夫々の社会から遊離することなく、密接な関わり合いを持つことによって相互に影響しあって今日に至っているのである。教会は、夫々の社会において異質なもの、アウトサイダー的なものとしてではなく、社会そのものに属する社会集団としての機能を果たして来たのであり、又そのような機能を果たし得た場所においては、教会が発展して行ったのである<sup>(1)</sup>。

然るに日本においては、個人としては社会に多大な影響を与えた者が輩出したが、教会が社会集団として日本の社会に果たしてきた働きは決して充分ではなかった<sup>(2)</sup>。殊に一般社会の生活面において寺院や神社に比べると、日本の教会は社会との関わりが非常に希薄だといわざるを得ない。よしあしは別としても、教会を中心として地域社会の行事が行なわれたり、日常生活のリズムの中に教会が組み込まれたりということはまずない。

キリシタンの迫害以来、キリスト教が、長い間<sup>はくがんし</sup>白眼視されてきたことが要因であるかもしれないが、教会が迫害を受けたのは何も日本だけではないし、既にそれ以来長

い年月が過ぎ、全く時代状況が変わり、多くの新宗教が伸長していく中で、キリスト教のみがなかなか成長しないのは、他に原因があると言わざるを得ない。その原因の一つは、ある一部の人々を除いて、教会が日本の精神文化や社会的慣習に無関心だったことではないだろうか。

「エコノミスト」という経済誌が、現代社会の変容を解くという特集の中で、宗教問題を扱い、なぜキリスト教は日本で停滞したのか、という記事を載せていた<sup>(3)</sup>。筆者は日本女子大学の島田裕巳氏である。解説そのものには疑問点が多々あったが、内容は示唆に富んだものであり、結論は、日本のキリスト教は信仰の純粋性を保とうとするあまり、日本の社会に合わせて変化して行くことをしていかなかったからであり、土着信仰との融合がなければ、宗教は民衆の心の奥には届かないということであった。習慣や形態はともかくとして、土着信仰の中身まで取り込まなければ民衆の心に響かないというのには疑問を感ずるし、キリスト教信仰の純粋性を捨てなければ土着化は出来ないとの論調にも賛成出来ないが、日本のキリスト教が日本の社会から遊離しているとの指摘は認めざるをえない。一般経済誌までが、なぜ日本でキリスト教が伸びないのかと問題を提起し、それは流動的社会の中で、キリスト教のみが自己変革することなく、社会の中に溶け込もうとしなかったからだという指摘には、耳を傾けざるをえない。土俗信仰を取り込むまではいかなくても、日本に深く根を下ろしている精神文化に関心を持つことが必須課題ではあるまいか。

## 2 信仰の純粋性と倫理性の問題

島田氏も触れていたが、キリスト教の純粋性の中に厳格な唯一神信仰がある。キリスト教の信仰から言えば、イエス・キリスト以外のものを救い主とすることは出来ないし、キリストによって啓示された神以外のものを礼拝することは出来ない。クリスマスやイースター等に見られるように、様々の他の形式や習慣を採り入れることは出来ても、イエス・キリストを除いて、或いは並列的に他の神々を礼拝することは出来ない。この点、ほとんど何の抵抗感もなく、異種の神々を礼拝してしまう日本的宗教姿勢との間には大きな隔たりがあって、その辺がネックとなっているのは事実である<sup>(4)</sup>。

また、聖にして義、愛なる神に対する信仰から必然的に生まれてくる生活面における純粋性と高い倫理性が、他のネックの一つとなっている。価値観の多様性或いは状況性は認められるとしても、多くの信者を得るためにと無批判に世俗的価値観や倫理

性を受け入れたり、純粹性を捨てたりすることは出来ない。信仰と倫理とは別物との考えもあるが、神を信ずる者としての生きる姿勢と言うものがある。教会には、人々に持つべき価値観や倫理性を示し保って行く役割があるのである<sup>(5)</sup>。

### 内村鑑三の例

よく内村鑑三や新渡戸稲造のような人物が現在も存在したら、もっとキリスト教は伸びるだろうと言われるが、実は彼らもこの問題にぶつかり真剣に悩んでいたのである。彼らはこの問題を避けることなく、正面から取り組んで行ったのである。その姿勢が多くの人々の魂に触れたのである。なぜ彼らはそれが出来たのであろうか。プロテスタント信仰が日本に伝えられ大勢の者が信仰に入ったが、同時に去って行く者も多くあった。その点に内村自身触れているが、全く新しいそして厳しいキリスト教信仰に、親近感と共通意識を持たせ、かつ、信仰を持続させた者たちの芯にあったのは武士道であったのである<sup>(6)</sup>。

彼に従えば、一たん信仰を受け入れながら多くの者がキリスト教から離れていったのは、キリスト教の厳格な道德要求に耐えられなかったからであり、その責はキリスト教側にあるのではなく人々の意志の薄弱さにあるという事になる<sup>(7)</sup>。彼自身の言葉によれば、「この事はキリスト教の恥にあらずして、全く背信の徒の恥であり、ひいては日本国民の恥である。一たび信じたものをたやすく捨てるという事、キリスト教のその厳格なる道德的要求に<sup>ちじよく</sup>応じ得ないという事は、正しく国民の恥辱と言わざるを得ない」<sup>(8)</sup>。今日でも同じことがいえるのであろう。しかしこれは内村によればキリスト教のせいではないので、失望することはないということになる。また日本にも希望がある、それが武士道だという。なぜなら既に日本人は、武士道においてキリスト教がさし示すような高い倫理性をもっていたからである。彼はいう「我らは人生のたいていの問題は武士道をもって解決する。正直なる事、高潔なる事、寛大なる事、約束を守る事、借金せざる事、逃げる敵を追わざる事、これらの事についてキリスト教を煩わすの必要はない。我らは祖先伝来の武士道により。これらの問題を解決して誤らない」という。ではなぜキリスト教を必要とするのかというと、「神の義につき、未来の審判につき、そしてこれに対する道につき、武士道は教うところが無い。そしてこれらの重要な問題に逢着して、われらはキリスト教の教示を仰がざるを得ないのである。キリスト信者たる事は、日本武士以下の者たる事ではない。……武士道を捨て、またはこれを軽んずる者が、キリストの善き弟子でありようはずが無い。神が日

本人より特別に求めたもう者は、武士の靈魂（たましい）にキリストを宿らせまつりし者である」<sup>(9)</sup>と述べている。

以上によっても分かるように、内村はキリスト教が求める倫理性は武士道がすでに求め実践していたものであって、なんら日本にとって異質のものではないと主張しているのである。しかし同時に倫理と救いとは、別な次元のものであるのものはっきり認識している。彼は宗教と道德に関しても幾つか言及しているが、道德と信仰の類似点、相違点をあげながら、宗教が道德以下のものになってはならないし、道德の無い宗教は宗教ではないと断言する一方、道德と宗教を同一視することの危険性も指摘している。道德性を強調しすぎると、孔孟釈基いずれ選ばずということ、すなわちイエス・キリストの救いを必然とせず、孔孟釈基いずれでも、人を善人にするものであればそれでよしということになってしまうと述べている。又「道德家」ほど世に不快な存在はないといいきり、信仰の冷却は道德の追求より来るとも述べている<sup>(10)</sup>。「宗教は道德を離れてはなりません。しかしながら道德以上でなくてはなりません。道德を生ずるものであって、道德の上に築き上げるものであってはなりません」<sup>(11)</sup>。これが彼の道德と信仰に関する見解である。信仰は道德をうみ出すが道德は信仰をうみ出さないということであろう。

彼は又いう、「キリスト教は最高道德であるという。そんなものではない。もしそんなものであるならば、人類を救うにあたって用をなさない。しかし、私を救うことはできない。」「キリスト教は道德ではない。罪人を救う道である。ゆえに特別に貴いのである。ただ仰ぎ見れば救われるという簡易道である。それゆえに何びとをも救い得る道である。今日の神学者と聖書学者とは、キリスト教を哲学化、倫理化して、余りにもむずかしい教えとなしてしもうた。しかしキリスト教はもともとそんなむずかしい教えではなかった。」「われを仰ぎ見よ、さらば救われん。……われわれ今日の日本人を救わんと欲するにあたって、これ以上のキリスト教を唱うるの必要はない。世を救う道は、旧い古い福音である」と<sup>(12)</sup>。

内村などによって代表される武士道的キリスト教理解が、よく倫理的キリスト教だといわれるが、その指摘は、半面的なものである。禅によって与えられた義を実践し、この世にあって清潔に生きようとする信仰者の姿勢がその背後にあったことを見落としている。パウロが主イエスの教えにふれ、律法主義を克服しつつなお主に喜ばれる義の実を結ぶ生き方を求めた生き方<sup>(13)</sup>まったく同質なものである。一方では高い道德性を求めながら又、「言葉」を重んずることを教えられて来た者たちにとって、

良心的に生きると同時に、目に見えない神の言、神の真実を信じるということは、理屈をこえてもともと身につけていたものだったといえるのである。

日本精神の象徴としての武士道とキリスト教との関係について述べる時、かならずひき合いに出されるもう一人の人物は、新渡戸稲造である。彼の武士道観に関しては、あとでふれることにして、道徳と信仰の面にしばって次に述べることにする。

### 新渡戸稲造の提言

彼の名著『武士道』の序文にも明らかな通り<sup>(14)</sup>、彼は日本には宗教教育がないのに、どうやって子弟に道徳教育を与えるのですかと問いに直面した時、日本には武士道なるものが存在し、それが日本社会の道徳鋭範となっていたことに気づき、道徳と武士道との関係を整理し公けにしたのであるが、彼はこの問題を彼自身の信仰の基礎に立って、特にキリスト教国である西欧の人々に明らかにしようとしたのはよく知られている通りである。しかし彼の場合も内村と同じく、道徳、倫理を重んじながら決して救いと道徳とを同一視とすることはなかった。彼は武士道の最も厳格な教えとして「義」をあげるが、義から分岐した正義の道理としての「義理」を説明する中で、「義理」は動機としてはキリスト教の愛の教えに甚だしく劣る。愛は「律法」であるといっている<sup>(15)</sup>。すなわち愛こそが律法であって、義も又愛によってはじめて成就すべきものとしてみている。更に、彼は武士道そのものは、現代の堆移とともに消失されるであろうが、「煙れる亜麻」の例をあげ、キリスト教によって武士道の本質が保持されていくことを願っている<sup>(16)</sup>。

以上の如く新渡戸も、いわゆる倫理と福音とは次元が異なるものであることを認め、救いの必要性を説いていることが理解されるので、武士道的キリスト教、即律法主義的信仰ときめつけるのは短路的すぎる議論といえる<sup>(17)</sup>。

しかし彼らがキリスト教の中に高い倫理性を見出していたのも事実であり、人々にキリスト教に根ざした高い倫理をもって生きていくべきことを求めたのも事実である。彼らは、理想は現実化されてはじめて意味があるとする実践的生き方になれていたもので、赦しと愛の信仰と、聖なる神の許、清潔な生き方を守ることは信仰生活における当然のこととして受けとめていたのである<sup>(18)</sup>。問題は、そうした生き方についていけない者、すなわち一方では自分の責任を自分で負うことなしに他者による働なしの赦しという教えに納得できなかつた者、一方では高い倫理性を守りきれなかつた者が多かつたということである。とくに今日に至るまで後者に属する者が多いのは、内村

が再三にわたって指摘している通りである。日本人には、信仰による義、価なしの救いもさることながら、神が聖であるようにあなたがたも聖なるものとして生きなさい<sup>(19)</sup>という教えや、救われた者にふさわしい義の実を結びなさいとの勧めの方が受け入れがたいものようである。だからといって、み霊の実を結ぶ生き方を一切すててしまってもよいとするのは、乱暴すぎないであろうか。人は元来人生の意味や目的や価値を求めて生きるものである。そこに光をあてているのがキリスト教であることは間違いがない。かつて幕府が倒れ、新しい時代を迎え、それまでの価値観が崩壊していく中で、未来に望みをおく多くの者たちがキリスト教の中に新しい価値を見出したように、キリスト教は常に福音に根ざした意味のある人の生き方を示し得る力を本質的に備えているものなのである。

日本においてキリスト教は、鎖国及び禁教政策のせいもあって、外来の異教として受けとめられ排除されてきた。キリスト教側も、独自性、あるいは純粋性を失わないために防衛的になり排他的になったのも事実である。しかし、武士道の中に生きる者たちにとっては、多くの日本人にとって最も苦手なキリスト教が示す純粋性と倫理性とは、決して異質なものでもなく、受け入れがたいものでもなく、むしろ自分たちが求め実践してきたものを、更によりよく示してくれるものであったのである。「神は一つ、そして多数でないことは、じつに余の小さな靈魂に喜ばしい音ずれであった。」これは土肥氏が引用している内村のことばであるが、土肥氏が指摘している通り、アミニズム的、多神教的、仏教的宗教生活に慣らされていた日本の人々が宣教師たちの説く唯一の創造主なる神、義と愛なる人格神に出会った時、大きな衝撃と魂の解放を感じたのである。殊に儒学に裏づけされていた武士道を身につけていたものたちにとっては驚きであると同時に、これこそ求めていた神でもあったのである<sup>(20)</sup>。ここにキリスト教を単なる沢山ある諸宗教の一つにしてしまうのではなく、あるいは「外国の宗教」よそのものにしてしまうのではなく、日本の社会の中に堅実に根をおろさせていく方向性を見出すことができるといえる。

## キリスト教と武士道との接点

### 1 武士的宣教師との出会い

武士道とキリスト教の接点に、宣教師たちとの人格的ふれあいがあった。「武士」に限らず、高い倫理道徳を求めていた者たちが、キリスト教に尊敬と親近感を持ったの

は、宣教師たちのピューリタンの誠実な生き方に接したからであった。

入信の動機は、理屈をならべる論議を通してよりも、人格的ふれあいを通しての方が多くある。愛にして義なる神、その人格的受肉としてのイエスを信じ従う宣教師たちが身をもって示した生き方に、武士道が追求していた在るべき「武士」の姿、あるいは「義人」を見出したのである。

彼自身、宣教師として東奥義塾<sup>(1)</sup>並びに青山学院で奉仕したC.W.アイグルハートもその著の中で、キリスト教に対する迫害が残る中で、初期の宣教師たちが示した勇気ある行動が真の武士のあるべき姿であると、尊敬をもって受けとめられたことを記している<sup>(2)</sup>。清教徒としての高額な人格と、又軍人としての勇気と克己の精神を示し多大の影響を与えた宣教師たちの代表的人物はヘボン、バラ、ブラウン、クラークたちであった。この間の事情に関しては、『近代日本とキリスト教』の中にも紹介されているが<sup>(3)</sup>、『植村正久と其の時代』所載の本多庸一の言葉を引用すると次の如くである。

「バラ氏は伝道の精神が満ちて居た。余は其言に感動したことはなかったが、其の精神には感服した。其の熱涙には感服した。我々をも武士として待遇せられた。明治五年頃我々は中々危険な目に逢った。……其の時バラ師は、汝らは危険がある。然し補っても之が為めに国に不満な心を懐いてはいかぬ。基督の弟子は国に服従せねばならぬ。米国に遁げることが出来ぬこともないが、其れは基督の精神ではない。国法に従って何処へでも流罪に処せられる覚悟をせよと言った。之を聞いて私はバラ博士が真に此の国の為めに来たことを知って、攘夷の念などはなくなってしまった。寧ろ居てもらはねばならぬように感じた」<sup>(4)</sup>。

以上の如く彼には信仰を受け入れようとする思いなどは毛頭なかった。むしろ攘夷の念の方が強かったし、宣教師の説くところにも反撥を感じていたにもかかわらず、バラの生き方に感動を覚えたのである。武士として、殉教も厭はず、宣教に命をかける宣教師の姿勢に真のますらをの姿を見出し、興感と、尊敬とを覚えたのである。Own Conversionの中で次のように述べられている。

Here I had a chance to come in contact with American Missionaries and I had to study the Bible before I took other studies everyday. From the first I could accept the belief in the existence of God, but in many things I could not agree with them, and was offended against Christianity.

... But there was one thing which could soften my offended mind so as to make



me to be patient and thoughtful. That was the kindness of the Missionaries to me, and their prayers, so earnest and sincere for their pupils and the nation, while the people were watching for a chance to drive them out of the country.

This was a great question to me, as well as to my fellow students <sup>(5)</sup>.

植村全集によると、ブラウンが迫害を恐れず雄々しく紳士として振まえと教えられたことに熊野雄七が痛く感動したとある。彼は基督的道德の高瀬にして勇健なるを悟り、宣教師に古武士の風を見出したのである <sup>(6)</sup>。

ジエーンズも護衛をつけようという申し出に、「武士道の国で援けなき一外遊者に害を加ふる様な卑劣な行為があるはずがない」と辞退したのに、「床しい武士的気塊」を見出しているし <sup>(7)</sup>、又スコットランドのパームと押川方義との関係も述べられている <sup>(8)</sup>。

最後にあまり紹介されていないジョン・イングの例をあげることにする。

ジョン・イング(1840 - 1920)もアメリカ北軍の騎兵少佐であったが、メソジスト監督教会の宣教師として中国に渡っていた。家族の中に病気のものが出、アメリカに帰る途中横浜に寄港していた。その時本多庸一に出会い、生まれたばかりの女兒を失うという悲しみの中にありながら本多の熱意におされ、弘前に赴いたのである。

彼は、日本にりんご、トマト、アスパラガス、キャベツなどを紹介したことで知られているが、教育・宣教にも熱情を注いだ。彼は本多とともに津軽薄校から私立となったばかりの東奥義塾で教えた。1874年12月の事である。彼らの熱心な指導により、1875年6月には15人の青年が受洗し、1876年19人となり、それまでの弘前公会は、日本最初の日本人によるメソジスト教会となったのである。弘前教会史によると、彼の在任中に洗礼を受けたものは35名で、この中には後に外交界、政界、教育界で活躍したものが含まれている <sup>(9)</sup>。

かくも多くのものが入信した動機は、やはりイングや本多との人格的ふれあいが中心的なものであった。イングの人格的感化力は次のように記されている。「資性忠厚義氣に富み……教授に当っては片言隻句悉く肺肝より <sup>ほとばし</sup> 迸り、談たまたま忠孝節義のことに至れば声涙並び下り、満堂肅として感涙に咽ぶ有様であった」<sup>(10)</sup>。

バスカム氏も「彼自身の軍人としての背景と気質とは、有望な藩の子弟のための学校の地位に全くうってつけであった」、「キャプテンイングの堂々たる <sup>ふうぼう</sup> 風貌と謹厳と親切な態度とは、青年たちにそのままびったりした」<sup>(11)</sup>と述べている。

ルシイ夫人の感化力も強く青年たちに慈母の如く慕われたとある。3年4か月の滞

在を終えて帰国するため横浜に向かう情景が、次の如く記されている。

夫人は小柄な、凛々しき態度を執られしも、限と口許には子羊の如き優しさを帯びたり。当時の生徒の心に反映し、強き印象感じを与えしは、夫人の慈愛なりき。明治 11 年 3 月 7 日弘前を出立せり。多くの生徒たちは、雪あるを物ともせず、草履穿きにて送れども、一里又一里往きてもどる者一人もあらざりき。夫人は折々籠より出で来り、「皆さん、帰りが遅くなると、又今日は寒いから、もうお帰り下さい」など言えども、尚袖を別つ事能はざりき。此の如く夫人は多くの者に慈母として、追慕せられ居りしなり<sup>(12)</sup>。

以上の如く宣教師たちと日本の青年たちとの人格的触れ合いが、彼らをキリスト教に導いたのである。その青年たちを中心にして津軽の城下町に、1870 年代にメソジスト教会が設立されたのである。

本多庸一は、キリスト教の知識を得るためには、書籍を読んだり学者の言うことを聴くのも良いが、より必要なのは霊的経験を積んだ生きた証人の影響を受けることだ。宣教師の働きは神の働きである。彼らや信仰の先達との人格的触れ合いこそが、人を入信に導くものだという意味のことを述べている<sup>(13)</sup>。

## 2 本多庸一における武士道とキリスト教

本多庸一の場合、本主題のまとまった論述はほとんど残されていない。しかし彼の全人格の中に、武士道とキリスト教信仰が、統一されたものとして受肉しているのを見ることができる。すなわち彼そのものが、両者が一体となっている一つの好例なのである<sup>(14)</sup>。

彼を語る場合かならず引用される二つの文がある。一は、「東奥に生まれし日本の国士、日本に出でし霊界の大人」<sup>(15)</sup>であり、二は、「本多君は国士である。人は本多君を基督教化せられた武士といふ。予は彼を武士道化されたクリスチャンと言ふ」<sup>(16)</sup>である。

土肥氏も述べる如く、本多庸一は土族意識を抽象したり、否定或いは克服する方法でキリスト教を受け入れたのではなく、全く直載に受け止めたのである<sup>(17)</sup>。

彼にとって、人の品位、倫理性がキーワードであった。本多が片岡健吉を偲んで述べた文がある。その中で片岡の奉仕の精神と高い品格に触れ、武士道の精神とキリスト教信仰がそれを可能ならしめたと述べている。すなわち「世に犠牲の種類多しといへども、君が転身ほど高貴にして、その功德の己に他にも甚だ大なりしものあらずと

言うべし」<sup>(18)</sup>。「君が偉大なる品性は、これ君が永生の信仰と、更に献身の結果として聖化せられたる武士道なりと言ふことを得べし」<sup>(19)</sup>と、述べている。これ。これによっても判る如く、武士道とキリスト教が求め、与える品性、人格は一致すると見ている。それだけでなくキリスト教信仰を得た武士道は、「進化せる武士道」であり、「聖化された武士道」なのである<sup>(20)</sup>。

では彼は信仰を全く倫理的側面から求めていったのかということ、決してそうではなかった。彼の場合も精神的葛藤と罪の意識の中から、己れを救い得るものはただイエス・キリストしかいないという救いの告白から信仰の深みに触れ、キリストにある新生の体験と応答として、人の在り方にまで及んだのである。中央政府から圧迫を受けている津軽藩の復興、また日本の未来のためにキリスト教に近づいたのも確かであるが、失意の中で彼は己れを見つめる機会を与えられ、自己の不完全さと罪を見つめさせられたのである。そこからキリストとの霊的体験が始まり、彼の一生の働きの基となったのである。長くなるので引用は避けるが、彼の英文の信仰告白の中にこの間の様子が詳しく述べられている<sup>(21)</sup>。

多くの者が本多を表わして「国土」と称ぶ、この場合国土とは、古い意味での武士を越え理想を高く掲げ、人々のため、国のため、世界のために仕える奉仕者という意味である。

米山梅吉は<sup>(22)</sup>『国土本多庸一先生』の中で史記列伝の中の「いにしえ国土の風あり、古の名将と雖も之に過ぎざるなり」という言葉を引用し「古は名将といふのが最も偉い人であった、其の名将も及ばないものに国土があった。」「国土の如何なる人格なるかを知らんと欲せば、先生を仰げばたる」と言い<sup>(23)</sup>、「本多先生は武士道に養われ宗教精神に感化され、愛国の精神を捧げた国土であった」と結んでいる<sup>(24)</sup>。本多自身明治34年の青山学院卒業式において、「国土の門出」と題して卒業生への辞を述べているが、それに依ると知識や品格のある紳士淑女となったとしてもそれでは国土とは称し得ない、もっと大きな抱負と希望を持ち、しかも現実を憂う心を持たねばならないということになる<sup>(25)</sup>。本多の言う国土とは、自分の置かれている立場に忠実であると同時に人類社会のために奉仕する人ということであった。いみじくも岡田哲蔵は、本多を「東奥に生まれし日本の国土、日本に出でし靈界の大人」と称えたが、国土とは聖化された武士、靈界における奉仕者の謂であったのである。本多と言う人物を通して、武士道とキリスト教が如何に融合し、新しい形をとったかを見ることが出来るのである。

### 3 新渡戸稲造の場合

新渡戸に関しては既に触れたし、彼の『武士道』<sup>(26)</sup>を見れば明らかなので、ここでは要点のみに触れていくことにする<sup>(27)</sup>。

彼は武士道を説明するに当たって、その要として五つの道徳律を上げる。その理由は武士道にあつての善悪の判断、基準は、人を自分の神聖な靈魂に結びつけるところにあり、五倫の道において他人の靈魂に結びつけるという義務の線上にあると見るからである<sup>(28)</sup>。

その五倫とは、義、勇、仁、礼、誠であるが他に、名誉、忠義、克己をつけ加える。彼は第一に義を取り上げるが、それは武士道にとって義が全てのものに及ぶ基本的徳であるからである<sup>(29)</sup>。「勇氣」も義のために行なわれるのでなければ意味を持たないし<sup>(30)</sup>、愛、寛容等の古来からの最高の徳も、義がなければ価値を失うのである。従つて「仁」もまた義、勇氣から出てくるものなのである<sup>(31)</sup>。彼は言う、「我々は無差別なる愛に溺れる事なく、正義と道義とを持って之に塩付くべき事を誡められた」と<sup>(32)</sup>。故に、武士道における仁（愛）は弱者、劣者、敗者に向けられるものこそ最も相応しいものであり、傲ぶる者を挫き、平和の道を立てるものなのである<sup>(33)</sup>。まさしくキリストは、失せたる者に見出される義の道なのである<sup>(34)</sup>。武士道とは義を飢える如く、渴く如く追い求める（マタイ5：6）道なのである。武士とは信仰箇条そのものを第一とする者ではなく、それを実践することを重んじた人々である。武士にとっての第一義は、品性を養い、行動することであった。

彼は武士道は、人の道として最善のものだと説く。彼は言う「多くのアソグロ・サクソンの恣意妄想を含むキリスト教は、武士道の幹に接木するには貧弱なる芽である」<sup>(35)</sup>、「従来からある幹、根、杖（武士道）を板こそぎにして荒れ地に福音の種を蒔くような事は、イエス御自身は決してなさない」と<sup>(36)</sup>。しかし彼は、封建的階級に培われた武士道は、やがてデモクラシーの世が来る時、消え去ると考えていたのは先述の通りであるが、ここには彼の矛盾がある。何故なら、彼由身英文のタイトルにおいて、BUSIDO THE SOUL OF JAPANと記しているように、彼の中にも武士道とは単に武士という一階級の思想、理念ではなく、より広い日本精神であり、日本の魂という理解と主張があつたはずだからである。

武士道は、武士という階級を越えた、もっと広義の志ある人々の教えであつたのである。彼がもう少しこの点に洞察を加えていれば、彼の『武士道』の終審の内容は異

なったものになっていたであろう。武道が、彼の言う如くより完成された人の道であるならば、成長こそすれ、消滅するはずはないのである。

いみじくも『武士道』を紹介したグリップスの言葉が、このことを良く表わしている。

「日本における世界の動きと封建制度との衝突に際して、武士道は決して防腐剤を施されたミイラとしてでなく、生きた魂として存在したのである。それは現実に人類の活力たる精神であった。

日本においても、基督教はその外国的な型や包装を解いて、異国晶たる事を止め、武士道が成長したその土壌の中に深く根を張るであろう。締めつけている紐と外国的の制服とを脱ぎ去りて、キリストの教会は大気の如く国風と化するであろう」<sup>(37)</sup>。

国際人として活躍し、日本に新風を吹き入れた新渡戸が『武士道』と言う日本の魂に触れた書物を著したことは、非常に興味深いことである。またその彼が内面性と、質素・素朴を旨としたクエーカーの中に、自己の信仰告白を見出したのも興味深い。彼の中にも日本におけるキリスト教を象徴的に見出せるのである。

#### 4 内村鑑三の場合

ここでは、武士道をやはり最高の精神、道徳とする内村がキリスト教との関係をどう見、どう信仰を受け止めたかについて焦点を合わせることにする。

最高の道徳とは言え、武士道は人に依って作られたものであるから、決して完全なものではない。完全なものは神の道のみであるから、武士道はキリスト教に依って完成されると役は考えている。武士道は人をまっさき救いに至らせる神からの賜物なのである。日本人も神の創造物であり、神は被造物全体に御自身を証したもう方であるから、当然日本人にも御自身を証ししておられる。その場が武士道であると言う<sup>(38)</sup>。すなわち「日本人もまた神の造りたる者その意味において神の子であります。……神は、我ら日本人にも御自身を証したまいて、その光の一部分を示したまいました。私は信じます、武士道は神が日本人にたまひし最大の賜物であると……」と言う<sup>(39)</sup>。また「武士道は勇気と犠牲の精神を重んじるが、キリストの十字架を思う時、キリスト教の示すそれの方がはるかにまさる。従って偏見を捨ててキリスト教に相對するならば、おのずからイエスの忠実なる僕とならざるをえないのであり、明治初年多くの日本武士が信者になったのは、この精神によったのである」と述べている<sup>(40)</sup>。

興味深い点は、武士道のないキリスト教は道徳にもろい。それはキリスト教国と称する国の、戦争、弱者に対する所業を見ても明らかであり、日本においてもキリスト者と称す人々のなすところが、往々にして武士以下であると見ている点である。従って彼はキリスト信者に対しても、武士道の<sup>こすい</sup>鼓吹の必要性を感じ、武士は最上のキリスト者を作ると確信している<sup>(41)</sup>。ここから彼の接木論が出てくる。短くまとめている文があるので引用する。

武士道の台木にキリスト教を接いだもの其のものは世界最高善の産物であって、これに、日本国のみならず全世界を救うの能力がある。今やキリスト教は欧州に於て滅びつつある。そして物質主義にとらわれたる米国に、これを復活する能力がない。……日本国の歴史に、深い世界的意義があった。神は二千年のながきにわたり、世界目下の状態に応ぜんがために、日本国に於て武士道を完成したまいつつあったのである。世界はつまりキリスト教によって救われるのである。しかも武士道の上に接ぎ木されたるキリスト教によって救われるのである<sup>(42)</sup>。

以上は、いささか彼の希望的信念が陳述されていると見るべきであろうが、次に述べるキリスト教界以外の彼や新渡戸への評価を見ると、あながち誇張された信念とだけは言えない。今日、日本で依然としてキリスト教が伸びないのは、物質主義、世俗主義が広がる一方で精神面、特に武士道的精神が忘れられ、片隅に追いやられているからではないだろうか。

最後に、念のため再確認しておきたいのは、内村も決して信仰を道徳と同一視していないという点である<sup>(43)</sup>。

## 武士道の側から見たキリスト教

日本においてキリスト教は、武士道を一つのチャンネルとして受け入れられて行ったことが分かる。今迄はキリスト教の立場から武士道を観て来たが、ここでは武士道の方はキリスト教的武士道をどう観ているかを取り上げる。

『武士道の歴史』<sup>(1)</sup>『武士の心、日本の心』<sup>(2)</sup>の著者、高橋富雄は武士道のまとめに来る者たちの中に、内村と新渡戸を挙げる。彼によるとまとめに来るとは、それで終焉とするという意味ではなく、武士道を人類普遍の道として、時間と空間を趣えた不変のものとし、次代へ引き渡して行く者たちということである。彼は「この人達は、それを日本の道として、世界に対して日本が日本である所以を主張し得るものである

事を説きながら、これを狭く、武士だけの道、封建日本の道、いや日本だけの道という説き方をするのではなくて、これを武士を越えた日本の道、歴史を越えた人間の道、そういうとらえ方をして、これを世界に於ける日本の道として位置付ける考え方をするのである」<sup>(3)</sup>と述べている。以上の如く、キリスト教によって昇華された武士道と、武士道によって変革されて行くキリスト教についてかなりの頁を割いている<sup>(4)</sup>。彼は内村、新渡戸などを通して武士道とキリスト教が結びつき、武士道は普遍的な世界精神として高揚されたものとなると観ているのである。

俵木浩太郎も『新・士道論』<sup>(5)</sup>の中で、武士道の終わりに来る者として新渡戸を取り上げ、新渡戸は武士道の継承をキリスト教の中に見ていたが<sup>(9)</sup>、同時に武士道の未来に悲観的でもあった。しかし武士道が新渡戸の言う如く普遍的なものである以上、これからも生き続けるものとしている<sup>(7)</sup>。

奈良本も、彼の新しい精神の模索の中で、武士道に思いが至ったのは、新渡戸の『武士道』であって、「私に於ける武士道理解の発端は、まさにあの冒頭の文章であり、新渡戸稲造であったのだ」と述べている<sup>(8)</sup>。彼は『武士道』に触発されて、『武士道の系譜』<sup>(9)</sup>を著したがその中でも、彼が武士道について改めて考えるようになったのは、新渡戸の武士道論によると述べている<sup>(10)</sup>。奈良本は武士道を絶対敵なものとはしていないが、新しい時代に必要より高い道徳と見ている<sup>(11)</sup>。そしてホイジンガの『中世の秋』の中の騎士道に関する言及を引用しながら、精神史に及ぼす武士道の意義に触れている。彼にとっての問題は、日本にはキリスト教のような倫理の絶対的規範がなかったということである。武士道には儒教という背景があったが、それでは不十分だとする。すなわち、「儒教道徳によって衣裳をつけられた武士道に代わる新しい理念が生まれなかったということが問題なのである。それだけの学問も、宗教も出てこなかったのだ」と言っている<sup>(13)</sup>。

ここに彼を新渡戸に惹き付けさせた理由があると思える。彼は内村鑑三にも触れ、内村は薄れゆく武士道精神の中で、最も武士らしく生き、同時に最も真面目なキリスト者の一人であり、最もヨーロッパ精神に通じていた人間として、日本の社会の空虚な形式主義に反発して教壇を追われた。しかし片隅に追いやられた武士道精神が追いつめられた中で、社会や政府の偽善に最も鋭い警告を発し得たとしている<sup>(14)</sup>。

以上のような例からも、キリスト教以外においても、キリスト教と武士道の触れ合いが、いかに求められているものであるかが分かるのである。最近に至っても『剣道時代』という剣道誌が、「愛の剣道」という特集を組んでいるが、キリスト者剣道家

として知られる佐藤卯吉範士の唱えた愛の剣道論に関する記事もあり、筆者も「剣の心と愛」の題のもとキリスト教と武道について稿を寄せている<sup>(15)</sup>。新しい日本の心の在り方を、キリスト教と武士道の中に見出そうとする動きは<sup>とど</sup>浄まるどころか一層求められているのである。ここに日本の教会が真剣に取り組まなければならない課題の一つがあると言わざるをえない。

#### 内村・新渡戸の次に来るもの - 結び

「論集」の真の都合上、これ以上述べる事が出来なくなったが、武士道とは特殊な人々のものではなく、より広い普遍的精神であることは明らかである。実は既に江戸時代初期、山鹿素行が士道としての精神哲学を唱えている。更に遡って西暦1千年頃の『開戦経』という書物の中に、精神的教えとしての「武」の精神がまとめられている。これらについては、別な機会に発表したい。ただ最後に、残された問題として、高橋富堆が指摘している一つの事を取り上げておきたい。それは「武士道と言うのは、武と言う芸を単なる技術や技芸ではなしに、一つの道の自覚に高めたものである。究極が道である事は正しいのであるが、武と言う芸や技から、ひとり歩きする道説=哲学説は武道哲学にはならないのである。」「武士道哲学から直に武道哲学に入るのでなしに武芸修練から武道哲学に進んだ武道説が、内村武士道や新渡戸武士道の次に置かれる必要を感じず」ということである<sup>(1)</sup>。ここに至ってどうしても取り上げねばならない人物がある。それは笹森順造である。弘前に生まれ、弘前教会において若くして洗礼を受け、幼少より剣を学び、津軽家及び山鹿素行の末山鹿元次郎牧師より小野派一刀流の正統を継いだ。他に直元流、林崎流の相伝を受け、剣道八段範士である。教会活動にも熱心で文字通りクリスチャンにして、武道の修練を積み上げ奥義に達した者である。経済的理由で廃校になっていた東奥義塾が、米国メソジスト教会の援助によって再興された時、米国にて南加中央日本人会書記長として日系人のため労していたが、メソジスト本部と学校の両方から請われ、再興初代の塾長に就任した。17年に亙る斬新な教育により、生徒のみならず教育界に多大な影響を与えた。すなわち入試におけるメンタルテストの採用、出身校の推薦の重視、夜間英語学部、夏季臨毎学校、いわゆる普通学科の他に芸術、武道、体育、宗教教育の重視、米国議会御度に因んだ生徒会の組織等々である。第二次世界大戦に至る混乱時に、学園を学園としてあらしめるために米山梅吉等に請われ青山学院院長に転任した<sup>(2)</sup>。敗戦後は、最初の国政選



拳に出、代議士となり、大臣、外交委員長、文部委員長などを歴任し国政のため尽力した。国際キリスト教大学の設立にも加わった。また戦後の剣道の復活に尽力したことは、剣道史に特記されている。彼は武人であり教育家であり政治家でもあったが、何よりも信仰の人であった。その信仰と武の心故に、義を重んじ不義を喜ばなかった。それ故に、不義に対しては厳しすぎるくらい厳しかったが、人の過ちを許すこと誠に寛大であった。そのため厳しく当たられた人もほとんどはその後、より深い親交を持ったものである。彼には『剣道』<sup>(3)</sup>『開戦経釈義』<sup>(4)</sup>『一刀流極意』<sup>(5)</sup>等の著述がある。人々は彼の中に古武士的風格とキリストによる義と愛の姿を見ていた。そして晩年自宅を開放し、宣教と武道振興のために、教会と道場を開設したのである。彼に触れる事なしに、その後のキリスト教と武士道の関係は先に進まないのであるが、別な機会に詳述することにし、ここでこの小論を閉じることにする。キッチン教授は彼とも親交を結んで下さったわけであるが、キッチン先生がこの小論を書くきっかけを与えて下さったことを心から感謝し、機会をあらためてまとめあげてを約したい。

## 註

### はじめに

- (1) 同教会は青山学院が青山の地に移って以来、学院の精神的基盤として、神学部の校舎（現本部）の中にあつた教会。学院の揺籃期及び困難な時期に物心両面にわたって学校を支えてきた教会であつたが、1950年代後半以来学院の拡張期に外に出され、後に別な教会に合併され、今日は同名の教会は存在しない。
- (2) この時教会と学校は両立出来るからと、青山学院から招きを受けて中等部（理事長真鍋頼一、院長大木金次郎、部長佐藤周象）宗教主任に就任し、牧師とチャプレンを兼任した。
- (3) 武道、キリスト教と文化活動のために建てられた道場。創設者の一人笹森腑造は後述するが小野派一刀流、林崎流、直元流の正統の継承者。現在は筆者がその統を継いでいる。

### I 問題点

- (1) 教会の社会集団としての役割については、拙稿「社会制度としての教会」青山学院大学同窓会基督教学会『基督教論集』36号、(1992年)、174頁参照。
- (2) 例えば日本における最初の国会を開くに至った自由民権運動に関わつたキリスト

者は沢山いたが、「教会」としては第三者の立場を取ってしまった。教会がもっと積極的に関わっていれば、その後の日本社会における教会の立場は違うものになっていたであろう。

- (3) 『週刊エコノミスト』毎日新聞社、1993年3月3日号。
- (4) 土肥昭夫氏も唯一信仰とその倫理が明治初期に大きなショックを与えたことを、内村を例に述べている(『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、1983年、48頁)。
- (5) 拙稿上掲「社会制度としての教会」参照。
- (6) 宣教師の立場からアイグルハートも、日本の初期のクリスチャンはサムライであったと述べている。(註2参照。)
- (7) 『内村鑑三信仰著作全集』、15巻、教文館、昭和38年、292 - 293頁参照。
- (8) 前掲、292 - 293頁。
- (9) 前掲、23巻、191 - 192頁。
- (10) 前掲、15巻、227 - 228頁。
- (11) 前掲、228頁。
- (12) 前掲、229頁。
- (13) この教えはガラテヤ人への手紙のちい顯著に表われている。
- (14) 『新渡戸稲造全集』第1巻、「武士道」、教文館、昭和44年、17頁。
- (15) 前掲、44頁。
- (16) マタイ 12:12 - 21、イザヤ 42章のイザヤの予言の中に、武士道継承の希望を託している。前掲138頁。
- (17) キリスト教学校の研修会でも、この議論が取り上げられている(「日本の風土とキリスト教」、キリスト教学校同盟、1985参照)。
- (18) 土肥昭夫、上掲、50 - 52頁参照。
- (19) ペテロ第一 1:15 - 16、コリソト第二 7:1、コロサイ 1:2ト22参照。
- (20) 土肥昭夫、上掲、48頁。

## II キリスト我と武士道の接点

- (1) 津軽藩藩校統括古館として1796年に建てられ、明治5年東奥義塾となった。初代塾長は本多庸一であり、メソジスト教会諸団体、政界教育界に影響を及ぼす者が多数でた。大正11年米国メソジスト教会により、ウエスレイ宣教100年記念行事として、キリスト教学校として再興された時、塾長に笹森順造が就任した。

藩校から数えると 197 年に及ぶ日本で最も長い歴史と影響力を持つ基督教学校である。

- (2) Charles W. Iglehart: A century of Protestant Christianity in Japan, Charles E. Tuttle, 1959, p.52.
- (3) 『近代日本とキリスト教』 明治編、基督教学徒兄弟団、昭和 31 年、51, 58, 59 頁。
- (4) 『植村正久と其の時代』 第 1 巻、教文館、昭和 41 年後刻版、588 - 578 頁。
- (5) 青山学院編 『本多庸一先生遺稿』、日本基督教興文協会、大正 7 年、巻末 3 - 4 頁。
- (6) 『樟村正久と其の時代』、上掲、578 - 579 頁。577 - 578 頁。
- (7) 前掲、579 頁。
- (8) 前掲、584 頁。
- (9) 『弘前教会五拾年略史』、日本メソヂスト弘前教会、大正 14 年、2 - 6 頁。
- (10) 『東奥義塾再興三十年史』 昭和 26 年、5 頁。
- (11) 『東奥義塾再興九十年史』 1967 年、256 頁にバスカム氏のイング小伝がある。
- (12) 上掲、『弘前教会略史』 巻末、フーズファー、17 - 18 頁。
- (13) 上掲、『本多庸一遺稿集』 巻末、6 頁参照。
- (14) 本多庸一の伝記として、以下のものがある。岡田哲蔵 『本多庸一伝』、日独書院、昭和 10 年。同 『我が先生』、青山学院、大正 10 年。米山梅吉 『国土本多庸一先生』、青山学院、昭和 13 年。青山学院編 『本多庸一』 昭和 43 年。川崎市郎他 『郷土の先人を語る』、弘前図書館、昭和 45 年。砂川萬里 『日本の代表的キリスト者』、東海大学、1965 年。
- (15) 弘前教会にある本多先生記念頌文。岡田の選文によるがこの時の事情は、『我が先生』の巻末に詳しく記されている(62 - 72 頁)。
- (16) 岡田哲蔵 『本多庸一伝』、上掲、402 頁。
- (17) 土肥昭夫、上掲、44、125 頁参照。
- (18) 『本多庸一遺稿集』、上掲、339 頁。
- (19) 前掲、340 - 341 頁。
- (20) 前掲、339 頁。
- (21) 前掲、巻末、4 - 5 頁。
- (22) 米山梅吉 (1868 - 1946) 三井銀行の重鎮で三井信託の創設者。貴族院議員、

ロータリークラブの導入者、青山学院同窓会会長、同理事。私財を捧げて幼稚園、小学校を青山学院に寄贈し、同校一貫教育の基礎を据えた。岡田鉄哲蔵も彼に促され本多の伝記をまとめた。彼の伝記として、青山学院初等部編（昭和 35 年）『米山梅吉伝』がある。

- (23) 米山梅吉『国土本多庸一』、青山学院、昭和 13 年、9 頁。
- (24) 前掲、27 頁。
- (25) 上掲、『本多庸一遺稿集』、293 頁以下参照。
- (26) 教文館『新湊戸稻造全集』12 巻に英文と矢内原忠雄訳とが収録されている。同訳は岩波文庫版としても刊行されている。現代語訳としては、奈良本辰也訳、三笠書房、1989 年がある。
- (27) 前掲、教文館版、126 頁以下に展開される。
- (28) 前掲、118 頁。
- (29) 前掲、41 頁。
- (30) 前掲、45 頁。
- (31) 前掲、49 頁。
- (32) 前掲、52 頁。
- (33) 前掲、53 頁。
- (34) 前掲、42 頁。
- (35) 前掲、131 頁。
- (36) 前掲、131 頁。
- (37) 前掲、25 頁以下、緒言より抜粋。
- (38) 『内村鑑三信仰著作全集』、上掲、23 巻、180、181 頁参照。
- (39) 前掲、180 - 181 頁。
- (40) 前掲、182 - 183 頁参照。
- (41) 前掲、183 - 184 頁参照。
- (42) 前掲、191 頁。
- (43) 前掲、15 巻、229 頁（本稿、問題点 註 10 - のところで引用しているところを参照）。

#### 武士道の側から

- (1) 『武士道の歴史』、新人物往来社、昭和 61 年。
- (2) 『武士の心、日本の心』、近藤出版社、昭和 61 年。

- (3) 高橋富堆『武士の心、日本の心』、419 頁。
- (4) 前掲、419 頁以下、及び『武士道の歴史』第 2 巻、266 頁以下参照。
- (5) 俵木浩太郎『新・土道論』、筑摩書房、1992。
- (6) 前掲、220 頁。
- (7) 前掲、220 頁以下参照。
- (8) 奈良本辰也訳、上掲、『武士道』、219 頁。
- (9) 奈良本辰也『武士道の系譜』、中公文庫、昭和 51 年。
- (10) 前掲、22 頁参照。
- (11) 前掲、序文参照。
- (12) 前掲、20 - 21 頁。
- (13) 前掲、130 - 131 頁。
- (14) 前掲、136 - 137 頁参照。
- (15) 体育とスポーツ社刊、1991 年 5 月号。

内村・新渡戸の後に来るもの 結び

- (1) 高橋富堆『武士の心、日本の心』上掲、428 頁。
- (2) 旺文社、昭和 30 年。
- (3) 院長交代の要が起きた時、一部の者たちがその期に学校の外面的拡張に走ろうとしたが、米山梅吉は笹森を院長に推挙し、学内浄化及び、キリスト教信仰による建学の精神を守ることを託した。これに反発する者たちが時の軍国主義の流れに乗じ笹森は国家非常時にキリスト教的すぎる学校運営を行なうと政府に訴えた。この間の事情は、日本キリスト教教育同盟、『日本に於ける基督教の現状』、95 頁に、同志社の湯浅八郎、立教大学の木村学長への軍部からの圧力に関する記事とともに記されている。その中の一部を抜粋すると、「……青山学院の高等学生がストライキをおこしかけた、笹森院長の人事が余り基督教主義に傾いているというのが原因だ キリシタン禁止の再燃 - 。キリスト教主義学校にまつわる悲劇が多い。同志社大学の湯浅総長の辞職……立教大学の木村学長……青山学院の笹森院長の事件も、愛国心に結びつけたものであった。……」。
- (4) 西暦千年の頃の書。大江匡房によるとされている書物の釈義の本。昭和 48 年発行され絶版になっていたものを、山中秀夫氏の求めにより日本出版放送企画社より平成 4 年再販した。
- (5) 一刀流極意刊行会より昭和 40 年に刊行され絶版となっていたものを、筆者が

体育とスポーツ社より昭和 61 年重版した。

(日本キリスト教団駒場エデン教会牧師、礼楽堂々主〔小野派一刀流、神夢想林崎流、直元流宗家〕)

## 本冊子について

本小論は、アメリカメソヂスト教会より派遣され 40 年の長きに亙り宣教活動に従事された、T・J・キッチン先生の退任帰米に際し、青山学院大学同窓会基督教学会が同先生に献呈する特別号として編纂した 基督教論集 第 37 号に寄稿したものである。

本文内に於ても触れているが、キッチン先生は青山学院理事、同大学文学部教授、日本聖書神学校教授などを歴任されたが、筆者が牧する、日本基督教団駒場エデン教会創設以来、関わり、指導して下さった事もあり、感謝を込めて寄稿したものである。

内容的には、論集 の頁数の制限もあり、かなりの部分を割愛したり、コンパクトに纏めたものであるので、いづれ手を加え再発表する予定でいる。それまでの間、多くの方々から、ご意見、批評、資料の提供などを頂きたく印刷に付し、お手許にお配りするものである。

T・J・キッチン先生、並びに信仰と武道の心を伝授してくれた亡き父に感謝の意を込めて、1994 年 5 月 10 日、誕生日に

日本基督教団 駒場エデン教会牧師 神学博士

小野派一刀流、神夢想林崎流、直元流 宗家

笹 森 建 美